

アトリエ 琉游舎 だより 74号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2020年3月11日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

春の彼岸会法要

3月20日春分の日 10時半から

☆彼岸は悟りの世界。煩惱に満ちたこちらの岸（此岸）に対して極楽浄土の向こうの岸（彼岸）を表します。私たちは六波羅蜜の教えを実践する事により彼岸へ渡ることができるとされていますが凡人であるこの身では、六波羅蜜の教えを毎日実行することは難しいことなので、せめて春と秋の年2回はその教えを実行する。これが現在の彼岸法要の意味となっています。

☆ちなみに六波羅蜜とは彼岸へ到達（パラミータ）するための6つの実践徳目です。

1 布施：施しをする。 **2 持戒**：戒律を守り反省する。 **3 忍辱**：不平不満を言わず耐え忍ぶ。

4 精進：一所懸命努力する。 **5 禅定**：心を静かに保つ。 **6 智慧**：真実を見抜く智慧をもつ。

☆「彼岸」というとなにやら抽象的な場所に聞こえますが、私は日常のやすらぎのところこそが「彼岸」であると思っています。自分自身が自由で素直で柔軟になったときに顕れる心の平安が、「やすらぎのところ」であり「彼岸」だと信じています。今生活しているこの場が彼岸です。

☆年に2回のお彼岸には、お墓参りや、ぼた餅を作ったり、茶をたてたり、瞑想したり、写経したりまた掃除をいつもより念入りにしたり、花を植えたり、鳥の声に耳を傾けたりと、いつもと違うことを一つでもいいので実践してみてください。それがあなた自身の年2回の六波羅蜜の実践です。

☆琉游舎で年2回の六波羅蜜の実践を一緒にしてみませんか？

☆琉游舎の活動は営利事業ではありません。また私は職業僧侶でもありません。お布施は一切お構いなきようよろしくお願い申し上げます。もちろん宗教宗派を問いません。すべての皆さんのための開かれた「場」です。皆さんのお越しをお待ちしています。

木 金 土 日

3・4月のスケジュール

月	火	水	12	13	14	15
16	17	18	19 映画会 13:30	20 彼岸会法要 10時半	21	22
23	24 読書会 13時半	25 居酒屋の会 16時	26 映画会お休み	27	28	29
30	31	4月1日	2 映画会 13:30	3	4	5 写経会 13:30
6	7	8	9 映画会 13:30	10	11 詩話会 13:30	12
13	14 読書会 13時半	15	16 映画会 13:30	17	18	19

- 読書会

3月24日(火)
4月14日(火)
13時半から
- 写経会

4月5日(日)
13時半から
- 詩話会

4月11日(土)
13時半から
- 居酒屋の会

3月25日(水)
16時から
- 映画会

毎週木曜日
13時半から

空気だけでなく景色までが春めいてきました。例年よりちょっと早めですがいつもの春がもうそこまで来ています。ここコリーナで日々自然の移ろいと一体となって過ごしていると、コロナウイルスにまつわるテレビや新聞の中の世の動向が私には縁遠い出来事に見えてしまうのは陽気のせいなのか、己の危機感のなさなのか。しかし宗教家がウイルスについて言及すれば、それは非科学的言辞であり徒に世の人心を惑わす流言飛語の類にもなりかねません。このウイルスにまつわるすべてのことも日々の私たちの行いの中にあるありのままの姿。分からないことは分からないままに、私たちはありのままに観ていくしかすべがないのです。

人は自分の目で確認できるものや科学的に説明がつくものは比較的素直（無批判）に信じることが出来ます。しかし目に見えないものや理屈で説明できないものには不安を覚えるものです。いつの時代にも自然災害や伝染病はありました。その発生が予想できずメカニズムも分からなかった時代は人は不安と恐怖にさいなまれ、そこから逃れるために占いや加持祈祷にすがっていたのです。それを無知蒙昧な未開人の所行と嘲笑して良いものでしょうか？現代に生きる私たちは科学が目に見えない恐怖や不安を払拭してくれる唯一のツールだと盲信していますが、果たしてその盲信が私たちに安らぎをもたらしてくれたのでしょうか？コロナウイルスは電子顕微鏡で見えることは出来ます。放射能は計測された数値で見えることは出来ます。でもそれは見たつもりで実は何も見えてはいないのです。自分の目や手で確かめることの出来ない忍び寄る恐怖に、人はこの科学万能の時代にすら精神的に不安定な苦しみの日々を過ごすことになってしまうのです。

いつの時代にも不安と恐怖はありました。鎌倉時代の祖師^{注1}たちは民衆の不安を少しでも取り除きたいと考え三藏^{注2}を涉猟し当時の最先端の知識と論理的な言葉を使って人々に安らぎを得る方法を説いてきたのです。その中でもひととき異彩を放つ祖師が日蓮聖人です。彼は民衆だけでなく時の権力鎌倉幕府にも彼の信ずる教を説きました。その幕府に提出した諫言書が「立正安国論」です。簡単にまとめると「相次ぐ自然災害と政治動乱によって民衆が苦しみにあえいでいるのは、人々が正しい教えである妙法蓮華経（正法）を信じずに、浄土宗などの誤った教え（謗法）を信じているためである」ゆえに「このまま謗法を放置すれば国内では内乱が起こり、外国からは侵略を受けて滅びてしまう」しかし「正法である法華経を中心にして国を治めれば国家も国民も安泰となる」と諫言したのです。今の合理主義・科学万能の視点から見ると全く無茶な論法のように見えてしましますが、日蓮聖人はこの立証のために様々な経典を引用してきわめてロジカルに説いています。おそらく当時では最も明快で合理的な論法であったため幕府は影響の大きさを危惧しこの諫言を無視し続けていたのですが、いつのまにか謗法と名指しされた宗徒は幕府筋からこの書の内容を聞き及び日蓮聖人を幾たびか襲撃し、幕府に働きかけついに佐渡流罪の罪を聖人に与えることとなりました。

幕府を巻き込む大騒動を引き起こした「立正安国論」は聖人には大変失礼な言い方ですが、今から見ると非科学的妄想の書と見るむきもあるでしょう。しかしその見方は「信」なき現代人の見方にしかすぎません。「信」が生きることの安心の柱であった当時の人たちにとって、法華経への絶対的な「信」の上に構築された「立正安国論」は彼岸へ通じる一本の大道を人々に示したのです。いつやって来るか分からない災害や理不尽な権力の横暴、食べ物にもままたらない日々の中でもやはり人は生きていかなければなりません。そのためにはいつの時代も人は寄って立つ安心の柱を求めるのです。私はその柱こそが「信」だと考えます。

今、世界は理性がすべての現象を合理的に解明できると言う理性信仰によってささえられています。そして宗教は非合理で信頼をおくに値しないものと考える人が大半でしょう。しかしこの現代の理性信仰は日蓮聖人が妙法蓮華経によって国家国民の安泰が実現できると信じた法華経信仰といかばかりの違いがあるのでしょうか。科学の観点では前者は正しく後者は誤りでしょう。しかし私は「理性」と「妙法蓮華経」は「信」の立場では全く優劣はなく同じ土俵で考えるべきだと考えます。私たちが理性への絶対帰依で獲得した便利な生活と、鎌倉時代の人たちが妙法蓮華経へ南無^{注3}と唱えたことで獲得した心の平安を、どちらかの二者択一ではなく、どちらも共存できる道を指し示すことが宗教家の役割です。大地震がくれば犠牲者の供養を行い、感染症が蔓延すればウイルス退散法要を行う。この信なき宗教儀礼にうつつを抜かすことを宗教家はもう終わりにしなければなりません。今ここにある私たちの不安と恐怖からの解放は理性でも信なき宗教でも獲得できないことは明らかなのです。「信」は政治家や学者や宗教家から与えられるものではありません。ひとりひとりが自分の願う「安らぎのところ」を見極め、そこに立つ安心の柱に向かって行いの道を歩み続けること、それが「信」です。ひとりひとりが自分の「信」を見いだすとき、そこが「安らぎのところ」なのです。人から与えられる信はまやかしの信です。それを盲信や妄信といいます。信なき現代に今必要な「信」はひとりひとりによって獲得された自分だけの「信」です。

今テレビや新聞から毎日のように聞こえてくる「私たちの言葉を信じなさい。さればウイルス退散、経済繁栄、美しい日本が実現する」という妄言を盲信する時代を終わりにしませんか。そのためにはまず今まで私たちが信じてきた価値観や道徳などを一度根本から疑わなければならなりません。そして不信なものは捨て去り最後に残ったもの、それこそが私だけの、あなただけのかけがえのない「信」琉游舎：戸井 出琉・恭子です。「信」によって立つ国を春の夜の夢に見て筆を置きます。 お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152